

保全社会学での課題の提起 —技術社会における報道の役割—

Proposal of Challenges in Sociology of Maintenance
- The Role of Mass Media in The Society Dependent on Technologies -

(社) 腐食防食協会 腐食センター 服部 成雄 Shigeo HATTORI Member

“Sociology of Maintenance” is a very unique field of activity in the JSM compared to the other academic organizations. Since the JSM is dealing with maintenance activities of people on large scale infra-systems, it is necessary to study and to systematically clarify the interface/interaction between the maintenance activities and related society. In this session, the recent discussions in the Sociology of Maintenance Workshop in JSM on the nature of special atmosphere surrounding nuclear power maintenance and influence of mass media on the atmosphere are discussed by showing actual examples of the course of accident/affair.

Keywords: Nuclear power maintenance, surrounding atmosphere, mass media

1. はじめに

「保全学」誌の冒頭に、そのスコープとして「保全科学」は「保全工学」と「保全社会学」の二本柱で構成されることが明示されている。しかし、実際の学会活動の多くは「工学」の面でなされている。理工系学協会の中であって、保全学会の特筆すべき個性は、科学・技術面の追求のみでなく、社会との接点で生ずる多様な問題に対して、そのメカニズムを解明し、より良い状況を探求しようとする「保全社会学」という新しい学問の樹立を目指している点にあると考えられる。「保全」が巨大機械システム等に対する日々の人間の行為の集積であり、さらにそれが周辺の人間社会と、経済的利害や安心／不安といった面で強い相互関係を持っていることから、この面での探求は必須と考えられる。

保全活動とそれをとりまく一般社会の境界上にあって、少なからず両者に影響を及ぼしているものの一つに報道機関—マスメディアが挙げられる。特に、テレビ・ラジオ放送、新聞・雑誌、インターネットなどが十分普及し、社会生活に浸透している日本では、「報道の自由」や「知る権利」を尊重しつつも、報道による世論誘導などが結果として生じていないか詳しく検討する余地がある。

本セッションでは、「保全社会学」なるものをなるべくヴィジュアルに捉える試みとして、近年日本で

経験された、保全と社会の境界で生じた実際の問題をとりあげ、そこで報道が果たした役割についての考察を紹介して議論に供することとする。

2. 保全社会学への取り組み経緯

前述の通り、保全社会学は保全学会の発足当初から当学会オリジナルな発想による検討対象とされてきた。従って、欧米での既存例から学ぶことが多い規格・基準の構築などと違って、前例、お手本がない。つまるところ、会員有志の手探り状態の取り組みがなされてきた。2007年の段階で、宮野らは「保全社会学の構築に向けて」^[1]と題して、それまでの保全社会学研究会の試行錯誤の経緯をまとめた。科学技術社会論やリスク・コミュニケーションなどに首を突っ込んだり、「そもそも社会学とは？」と改めて入門書をひも解いたり、それなりに議論は尽きず交わされていた。そこに、業を煮やした宮氏から、もっと各論を詰めて、研究会の成果物に見える形にし、それを積み上げるべき、との示唆が与えられた。（筆者個人としては、これらの勉強会や議論は、会員相互がほぼ同レベルの認識を共有するようになるまで、じっくり続けることにも意義はある、と考えていた。なぜなら、前例のない研究分野なのだから。しかし、いつまでたっても学会内にすら発信できる「形」のある論の提起ができない状態は発展性に欠けるといふ反省もあった。）

宮氏の提案として、大きい刺激となったのは山本七平著の「空気の研究」^[2]に示された概念の導入であったと思う。「その場の空気に押されて・・・」とか、「あの空気の中ではちょっとね・・・」というあ

連絡先: 服部成雄、〒113-0033 東京都文京区本郷
2-13-10、(社) 腐食防食協会 腐食センター、
電話: 090-7234-8530
e-mail: hanzo1374_hat@mbn.nifty.com

れである。「空気は理屈を嫌う。嵩じて、科学的説明も嫌う。」という説明でピンとくる。原子力発電という極めて社会性が強く、科学・技術を集積した巨大インフラ施設の保全を検討対象の一つとしている本研究会員の多くが、「これだ！」と食いついた。

3. 現在、そして今後の研究方向

宮は「原子力社会現象の”空気と水”による分析」^[3]と題した論説で、具体的事例（事故、事件）について図1のような3×3マトリックスをそのセル毎に検討して空気が醸成される条件、要因などを分析すること、また空気が水を差されて（熱に浮かされているような時、現実に戻すアクションなど）、収縮してゆく過程を追うことでどのような「水の差し方」があるか、を抽出することもできると提案した。

	発生	膨張・頂上・展開	収束・終焉
要素			
要素間の結びつき			
影響力			

図1 空気の発生から収束に至る要因、影響等の3×3マトリックス

マトリックスは「発生」×「要素」のセルの検討から始まる。空気の発生、醸成はいったい誰、または何によるのだろうか？ 戦前の日本や現在も存在する専制国家には、時に暴力を備えた権力が流した濃厚な空気が充満している。一方、オカルト集団などでは、カリスマ崇拜、信仰に人々は催眠術にかかったように縛られていることが多い。これらは極端なケースだろうが、権力や利益集団が特殊な空気の醸成源になっていることは珍しくない。また、日本の特徴を考えるなら、①農業社会から発したことによる「村八分」のように、馴染みないものへの警戒感、②非論理的で情緒的、理論不信、③原子力については原爆の原体験、④地震国ゆえの予知困難なものへの恐怖、などが関与していよう。

このような素要因ともいえるところから噴出す空気のその後に影響するものとして、マスメディアや教育が挙げられる。これらがともに強権力のもとで

規制下におかれる、または洗脳される場合もあるが、それは異常時でのことに限られるとあってよい。

しかし、マスメディアに関しては、話題性に富むニュースを追求する、という本来の性格ゆえに平常時においても、往々にして当該機関としての一貫性に欠け、少々事実とのずれがあっても、より早く、興味を引く報道の仕方を選ぶことがある。ここにマスメディアが空気づくり、またはその膨張に一役買うという状況があり得るようである。

一般に、図1での1列目～2列目の段階ではマスメディアは大いに活躍するが、3列目の収束期に入ると空気の希薄化と同調するかのように、報道も姿を消してゆくことが多い。マスメディアが空気に水を差して収束に向かわせたという例を、少なくとも筆者自身は知らない。とすると、空気とマスメディアの相互関係は実際どうなのか、との疑問に突き当たる。

4. むすびにかえて

本セッションでは、ジャーナリスト出身の新井主査のもとで、これまで検討・議論してきた、この話題についての各論を紹介し、議論に供したい。すなわち、原子力にまつわる比較的社会性の大きかった近年の出来事を取り上げ、現場での事実と空気の变化にマスメディアがどのように関わったかを客観的資料によって整理し、考察する。

なお、私だけの感覚かも知れないが、保全学会及び保全社会学研究会にも、かなり濃厚な空気が満ちているように思える。それは本学会のをリードする方々や会員多くの顔ぶれを見れば分かることで、原子力に関して推進側の人たちがマジョリティーの集まりであるという印象が拭えない。だからといって筆者が単純な原発批判派であるわけでも決してない。ただ、理論的に高レベルで、中立であるからこそ一般から頼られ、権威ある指導ができる学会としては、あまり濃密な空気によって門戸を狭めることにならないことを期待する。

参考文献

- [1] 保全学会 保全社会学研究会：保全社会学の構築に向けて、保全学会誌、Vol. 6、No. 2 P. 35, 2007
- [2] 山本七平：「空気」の研究、文藝春秋社、1983
- [3] 宮 健三：原子力社会現象の「空気と水」による分析、会内資料、平成20年10月5日